

随想

金(ゴールド)の今昔物語

並河義博 (東村山)

1 金の人気は衰えず、価格も高騰

日本経済は長いデフレから脱却して昭和の時代に経験したインフレに回帰しつつあるが、世界的に見てもインフレヘッジに強い金の価格上昇は止まらない。

個人の金地金の売却益は総合・譲渡所得になり、確定申告をする人が増えているようだ。

昭和61(1986)年「天皇陛下在位60周年記念金貨10万円(純金20g)」や平成2(1990)年「天皇陛下御即位記念10万円金貨(純金30g)」に代表される金貨が造幣局より発行され、1g当り15,808円(2/19田中貴金属)の時価を見ると相当値上がりしていることが分かる(同じ10万円金貨で金の重量が違うのは奇異に感じるが、重量で偽金貨対策の設計らしい)。

このように金は硬貨の鑄造としてだけでなく、宝飾用、歯科、IT製品等の用途がある。

モノの価格は需給により決まるが、金の産出量は限られており、昨今はロシアのウクライナ侵攻による制裁でSWFTから離脱された脱ドル化だけでなく、トランプ新大統領の威嚇外交でアメリカ離れ(ドル離れ)で各国中央銀行が金買いに走り、金相場が右肩上がりとなっている。

2 金の古今東西の歴史と錬金術

地球上に存在する金は寿命をむかえた恒星の衝突により作られ、地球が形成されたとき、その核に沈み、隕石の衝突で近くの表面に残存したと言われている。

金は錆びたり変色することがなく、その持つ美しい光沢は純粋さや完全さを連想させ、文明が始まった当初から人々を魅了した。

古代エジプトでは支配者ファラオの永遠の地位を約束するため、王族のミイラは黄金のマスクといった副葬品で飾られ、ツタンカーメンの墓では

友

ファラオの遺体が純金の棺に納められていた。

黄金への永遠の欲望は貴金属に別の物質を混ぜて科学的に人工の金や不老不死の霊薬を探求する「錬金術」が広がった。

不老不死(長寿)の探求はヨーロッパ貴族で金を飲む習慣が広がり、悲劇を招くことがあり、中国の五代十国時代の南唐の裂祖が錬金術で金丹を服用して死んだ。

子供の頃の「鼻くそ丸めて萬金丹」と言う言葉を思い出したが、安本丹はふざけすぎか。

金や銀は胃液にも溶けず、体に取り込まずに排出されるので健康に害はないため、金粉(金箔入り)酒は祝い事等に慶ばれている。

明治時代から口中清涼剤の「仁丹」は薬草を丸めて銀でコーティングをしたもので長く愛飲されている。

市中で販売されている「金芽米」はお米の中に金が入っているわけではないが、精米の過程で亜糊粉層を残した無洗米で、旨味があり、栄養素の宝庫として注目されている。

なお金への欲望がもたらす危険性では金の採掘に奴隷を使ったり、1848年からのカリフォルニアのゴールドラッシュや金鉱をめぐる戦争、環境破壊等がある。

3 日本の金山

13世紀イタリアのベネツィア出身のマルコポーロは少年時代に父と中国の元に向かい、フビライ・ハンに気に入られて元で24年過ごし、帰国後「東方見聞録」を出版して有名になった。この本の中で日本はジパングと称され、平泉の中尊寺金色堂や交易での金の支払いで金の国として紹介されていた。

日本には古くから金山、銀山が発掘されていたが、時代により栄枯盛衰の歴史があり、この度世界遺産に加えられた佐渡の金銀山は特に著名である。

更に甲斐の金山(湯の奥)、伊豆の金山(土肥)、薩摩の金山(山ヶ野、串木野)、北海道の鴻之舞金山(紋別)、静狩金山(長万部) <ここは最近豪州資本が再試掘開発>が挙げられる。

現在、日本で唯一金鉱として採掘されているのは鹿児島にある菱刈鉱山で、住友金属鉱山が良質